

公開講演会

白寿をむかえた文化財建造物の保存 明治30年古社寺保存法が制定され、わが国の本格的な文化財建造物の保存が始まる。以来今年で99年目、人間でいえば白寿をお祝いする年となった。社寺所有の建築に限られていた保存の対象も昭和4年の国宝保存法、昭和25年の文化財保護法と法律改正により拡大され、城郭、民家、洋風建築等もその対象となった。近年では鉄道施設、ダム施設等の近代化遺産も指定されるようになり、現在約3500棟が重要文化財に指定されている。

修理工事報告書も昭和初年から発行されるようになり昭和30年代からは根本的な修理の時は必ず刊行されるようになった。現在約1200冊を数える。

以上のように重要文化財建造物の保存については手厚い保存措置が講じられてきた。今後は国民意識を含めた底辺の広い文化財建造物の保存措置が課題となるであろう。 (村田健一)

頭塔の発掘と復原 頭塔の復原整備に先立って行った発掘調査では頭塔に関する様々な事実が明らかになった。頭塔が石積の基壇上に立つ7段の階段状石積を本体とし、石積には瓦葺きの屋根がのりきわめて特殊な形態の仏塔であること。東西南北の各面にはそれぞれ11体の石仏が配されており、頂部中央には刹が地中から立ち上がっていたこと。塔本体内部には一時期古い、ひとまわり小さい頭塔があること、などである。本講演ではこれらの成果に基づく頭塔の復原案を紹介し、頭塔が一種の層塔であることを明らかにした。その結果、頭塔のルーツはこれまで言われてきたような、インドの塔を直接の起源とする考えや、インドネシアのボロブドゥールの影響を受けたとする考えではなく、中国、朝鮮半島で発展した層塔の一形態であり、それをわが国においてさらに特殊な形態に発展させたものと考えた。また発掘成果を基にした復原整備の考え方と、実際の復原手法を紹介した。 (高瀬要一)

空中写真撮影の歴史 日本における本格的な空中写真撮影は、大正8年に来日した、フランス陸軍航空教育団による日本陸軍飛行隊への教育から始まった。フルリエ少佐の指導を受けた下志津飛行学校は、大正12年関東大震災後の復興計画のために東京市全域を撮影した。この成果により空中写真が都市計画に不可欠な情報源であるという認識が高まり、翌年には名古屋、京阪神地区などの大都市圏の撮影がおこなわれた。昭和に入ると伊勢神宮のある宇治山田市、橿原神宮周辺の神都計画などの国家事業のほか、都市計画法の適用を受けた一般都市のために、空中写真の撮影が行われた。大正期から昭和初期は、撮影は、陸軍偵察飛行隊が演習の名目で民生協力した。昭和10年代からは、軍の偵察機の払下げを受け、空中写真の撮影を請負う会社が登場した。昭和12年軍機保護法が施行されてからは、空中写真は、軍の機密になり大阪市以外資料は、現在も秘匿されたままである。 (木全敬蔵)

イースター島・モアイの発掘 1995年、ユネスコ世界文化遺産にチリ国イースター島が決定した。その指定申告書に「遺跡の調査、整備に日本の協力があつた。」とあつた。1992年から4年間、民間資金のメセナに協力し、多数の所員が参加した。島最大の遺跡・アフ・トンガリキは、1960年、チリ大地震の津波によって消失した。この祭壇のアフの上座る15体のモアイの発掘、修復、再建のドキュメントを述べた。

(猪熊兼勝)

